かぐやひめ

♪①	ナレーター	昔、竹取の翁（おきな）という人がいました。 翁というのは、お爺さんの事です。お爺さんは、野原や山で竹を切って色々の物を作りながら、山の中にお婆さんと二人で暮らしていました。	竹林
	翁	「今日も良い天気だ。このあたりで、仕事にしよう。 良い竹がいっぱいだ。」	斧を持って 翁登場
♪②		「おや、何か光っているようだが、何だろう?」	遠くを見ながら 端に移動
		「な、なんと!竹が、光っている。 よし、これを切ってみよう。」 「えい!」 「おお!」	光る竹　中央に 登場 斧を振り上げる 赤ん坊、竹の中 から登場
♪③		「なんと美しい・・・私の取る竹にこもっていたこの子は、私達の子どもになる人に違いない。お婆さんもきっと喜ぶことだろう。」	赤ん坊を抱き 退場
♪④	ナレーター	お爺さんとお婆さんは、この子に「なよたけのかぐやひめ」と名づけて大切に育てました。 この子を育てるようになってから、お爺さんが竹を取りに行くと、取った竹に必ず黄金が入っているので、お爺さんの家は、見る間にお金持ちになりました。	翁の家
	翁	「かぐやひめは、不思議な子どもだ。ここへ来てまだ間もないというのに、もう一人前の娘になってしまった。 かぐやひめや、こっちに来てごらん。」	翁登場
	かぐやひめ	「はい、お爺さま。」	かぐやひめ登場
	翁	「かぐやひめや、そなたの美しさは、国中に知れ渡っているようだ。 たくさんの若者が、お嫁に欲しいと言ってきている。 さて、どうしたものか・・・。」	

	かぐやひめ	「わたくしは、お嫁になど行きません。」
	翁	「そうは言っても、今日も熱心な若者が３人来ているのだよ。」	翁、３人の若者を連れてくる
	かぐやひめ	「それでは、お会いしましょう。」
	かぐやひめ	「私は、どなたのお嫁さんになる気もございません。それでもどうしてもと言われるのなら、私の願いを叶えていただきたいと思います。」
	若者たち	「どんな願いでも必ず叶えてみせましょう。」	全員退場
	ナレーター	かぐやひめは、一人一人にとても難しい注文を出して、その珍しい品物を持ってこなければ結婚してあげませんと言いました。そうして、長い月日が過ぎました。
	かぐやひめ	「お爺さま、どなたか、いらっしゃいましたよ。」	かぐやひめ登場
	翁	「さて、どなたか・・・。」	翁、倉持を登場させ、退場
♪⑤	金持ちのみこ	「私は、倉持（くらもち）のみこ。かぐやひめのため、遠い蓬莱（ほうらい）の島に行きこれを探してまいりました。金と銀の根と茎で、しらたまの実のなる枝です。」	宝の枝を出す
	かぐやひめ	「まあ、なんと美しい物でしょう！なにやら、外が騒がしいようですが・・・。」
	翁	「倉持のみこさま。なんでも、宝の枝を作った職人が代金を払って欲しいと押しかけて来ています。いかがいたしましょう？」	翁登場
♪⑥	倉持のみこ	「そ、そんな・・・。」	倉持、顔を覆って退場
♪⑦	阿倍のおとど	「私は、阿倍のおとど。私は大変な金持ちだから、私のお嫁さんになる人は、必ず幸せになります。かぐやひめに頼まれた、この、世にも珍しい、ひねずみのかわごろも、沢山お金を払って手に入れたのです。ご覧ください。」	安部登場
♪⑧	かぐやひめ	ひねずみのかわごろもは、火に入れても燃えないと言います。	皮衣を火に近づける。燃える。
、	安部	「おお！だ、だまされた！」	安部退場

♪⑨	磯野守中納言	「私は磯のかみ中納言。かぐやひめの言うて、つばめの巣にある子安貝を探し求めて旅をしてまいりました。そして、とうとう見つけました！」	磯の守　よたよた登場 子安貝を差し出す
	かぐやひめ	「まあ、お怪我までなさって、大変でしたね。」	近寄って、顔をそむける
		「これは・・・つばめの糞ではありませんか！」	磯の守、倒れる 全員退場
♪⑩	磯の守	「そ、そんな・・・」	
	ナレーター	こうして3人の熱心な若者は、揃って、かぐやひめをお嫁さんにする事に失敗しました。	
♪⑪		ある年の夏の初め頃から、かぐやひめは月を見ては涙を流すようになりました。 お爺さんとお婆さんは、心配でたまりません。	三日月 かぐやひめ登場 泣く仕草 翁登場
	翁	「どうしたんだい。泣いている訳を教えてくれないか？」	
	かぐやひめ	「なんでもありません。」	
	翁	「そうか、それならいいが・・・」	そのまま制止 半月
	ナレーター	その年の8月になって、満月の日が近づいてきました。 明日は、満月という夜の事。	
♪⑫	かぐやひめ	「お爺さま、お話があります。わたくしは、もともと人間の世界に住むものではありません。」	
	翁	「何を言っているのか！」	驚いて
	かぐやひめ	「わたくしは、月の世界から来ました。明日の夜は、いよいよ空から使いが来て、天へ帰る事になりました。」	
	翁	「あ、明日と・・・ どうにかして、もっと長く、私達と一緒にいてください。」	伏して頼む
	かぐやひめ	「わたくしの力ではどうしようもないのです。どうか、そんなに悲しまないでください。」	翁を抱き起こしながら
	翁	「何とかならないものか・・・。」	おろおろ歩き回る

♪⑬

ナレーター	お爺さんは、どうしてもかぐやひめの事を諦め切れず、偉い人に頼んで、２千人の兵士に家の周りを守ってもらう事にしました。いよいよ、満月の夜になりました。	満月 兵士登場
翁	「かぐやひめや、どこにも行かないで、ずっとここにいておくれ」	翁、かぐやひめの手を握って
かぐやひめ	「それはできません。」	首を横に振って
ナレーター	夜中近い頃、家のあたりが真昼のように明るくなりました。 そして、天の使いが、かぐやひめに天（あま）の羽衣を着せかけました。 不思議なことに、兵士達は皆、力がなくなって弓を射る事ができなくなりました。	かぐや、中央へ その他、両端へ
かぐやひめ	「長い間、お世話になりました。 ありがとうございます。 これからは月のよい夜には空を見て、わたくしを思い出してください。」	
翁	「かぐやひめ・・・」（むせび泣く）	羽衣天に飛んでいく
ナレーター	こうして、かぐやひめは空高く消え去ってしまいました。 みなさんも、今夜、空を見上げてください。 どんな月が出ているでしょうね。	翁、兵士退場 満月のみ